古今雜談集

上

神佛信心利生功德の事徒に
多く著述の書多くいへども
くハ佛者の撰集なるもの
の如く佛者の風ハ移り遷り俗
人これを志ゝるものなり出家の風ハ
吹ちるを我師常に是を嘆じ古
今見聞の因果歴然たるを撰集め
俗人の職をつとめ免れ神佛信心せ

もむとへうきの内温をけうこ
古今雜談集と名つを滅後去形見
徒らに志けうこむ童男童女の一助ゝ
ゝ竊に予に投ちこの予なきへうこ
是に有志去事ゝ悉く書寫し與
物ゝ時ゝ筆ゝ労多ゝ書寫
誤謬あるこまた師ゝ意に通ゝ事
乃ち敢むこ恐怖黙止ゝ事

梓ゝ鏤めゝ必安ゝ知ゝ学ゝ事
をゆるゝ事

文政十三年寅の孟春

尾藩　觀露齋識

古今雜談集上

目録

一 怨靈之事
一 與力增上緣之事
一 怨念之事
一 古今是非相違之事
附 武王紂王之諫を訪ふ辯
一 因果歷然之事

古今雑談集上

怨恨事

文化九年の春江戸堀田備前守殿の一蝶斎と云へる絵師御所能の書を絵師に成り[illegible]人にて御所下とて[illegible]しに法家の家中数多の門人にて賞せられ世に其業を成す者一人にて仕織と云へる掛物を写し一枚宛にて[illegible]一蝶斎の弟子に[illegible]

[illegible]

よりて四人ども又の事なれどせんかさもあく他
流をもかたとおくて猫ん紙苦めるれが孫にん
るれ玉時を書をおの擲し玉時を又の道あるぬ
乃紙を大切をて寫をなどをれた一蝶高素
を強乱乃生貴なしだ沈のお腹を伊織をなく
乃乱ん者おや解し一間を撫へ三方紙張く国を
一方紙指ふみてを弁へ押迫を抜を流ん蝶と
文に己を書とをて怪る乱乃伊織を
以よく腹怒をて又を書が好事を拵へ拵
を寫をれた一蝶高大怒を備乃傳を

病おくを薬をあ
をべをべをも
傷を牡しおなべ
海迫をおくべ
をへを二を
又を金をちて乱
病せべ乃よあ
れた二をおを
流をよおをて沈と
拵あを紙をて沈り
を紙をよを紙
を彼女氏の紙を
ゆををし衣女の

木を力をへく散へおを擲す事を拵へを又
も乃を乃ちおを紙を脇しをへて国を高
ら生奴流海をを拵なりを拵も神を氏流へ
一蝶高へれ色俺なをを乃つれを伊織へ抑
迫ら生を流ハ一蝶を国へく情へを振
舞げを乃をへを国を草腹月抑法の比伊織を
を国を乃締を氏紙破を直をを紙傷を氏ず
知面を氏陸を乃迫の一蝶高色を乃を
を乱ん紙清高を乱を乃をを俗に拵を
を乃を流高乃の内小雪信西巴師吉田素の

次男生得学問志厚く剣術を好み一
蝶斎つ人乃内弟一二と年ふ程の斎弁あて
人柄もよく出来人も恐れ敬一蝶斎の妻子
となりさもぐ家臣師範いまも新たに
羽生年正月来の法日本橋通に水死人乃
門弟どもの噂乃起き今く信織ふ仕て宮舟
なしだ妻子家臣に仕て見とゝんれだまぐふべく
と好き信織ふてゝもれだ意ぎ仕りて一蝶斎
あ好く其死験結及森式弟ふ見管むべき
むつかけまで一蝶斎頭を知りて又とゝ捨水

死ひゝゝ程乃不覚の変してゝおぎに及び
そゝに捨置べしとひ教ちて吹乃ふ新合い
なりけされども蝶斎ふ便の事ゝなひ
内くゝ死験結ものおく森式ふ見
ち新ふ夜ゝ彼嫁無乃ふ痛
計雅ふあくゝ無用水腹ふかゝ苦
病ふ強ふ及ぐ絶ふ三日三夜大苦痛て
悩新て死ちけふ一蝶斎今く同病
あ日ゝ変ゝ種の不快物行附ふ例ふ人
好くゝ吹ひがゝく見ふ水腹ふなり三日三夜め

苦ひ刺すふ法ん
て死内ふ夜苦して
和及ふ新れ来て
文と新ふ腫む
文力と捨てゝ
ふ新れ法ふ
新て色和腫ふ
絶ぐれ法ひに
新ふ二七ふ同じ
拾ふれ法ぐふの
八ふふ新力意俗
と利く法薬し新

餓鬼饑渇なき終
さしもへども長き女
乃霊寺を聞ず
なりしが八才の今は
万針をぬひて犬
に歎きけるに
納派の鉢のなか婦
然も術の法を思ひ
てて兄弟の隠し
呑む術の切法
大なる事と戒し
あれだ八歳の大なる
晩び子を述べ

にのがれ行きて前利菓子を支へに為終ひ
蘇我の式当面倒に宗とし用ひなりとし術の
乃一族の仏壇もなきなれど先しく三見の住所を
携へ床に机を設けて安置し屏風を引きめぐらし
香華も供へて追福を祈り終りに其夜もひ右
屏風の内震動し始くし隠火あらはれだ川や
もんて又消家内鳴動する事影法師の毛を
立ち恐しながらも見ずる者これを見よりて物語にし遂
丹ぬ人の同仕の男女も怖れ逃て雁をとらひて
逃出ず童子一人のみならず終れども今覚

おやかく詠じれ
とも手向をも為
れ人の其夜も居
女寺にて八歳のも大
ひとり悦びけるなり
まがし流で生じける
とかむ喰咲一蝶画
が書中も全さの事
と知りてうし了ご
さまてて高に記
しぬ
或人同じ震動隠火を
乃筆記にあり

客沈勇なれしだ文士動する事なくうつ
附の詠じ料理なぞの所をおもんと燈大も
打く屏風の内に入刀を帯して窺ひ居る
に夜との如く震動して隠火だ川と顕はる所
を一打に切付れだ手おどへて隠火さ消えて
笑ぬりなど按火を灯しみれば又ぬ所に位
膵を載せたる机も中より二つに切放てり是ら
あるても隠犬の形を切とゞへども刃
虚体幻化の業犬なれしだ人力の及ばざる所にあらんぢ
しれども是は全く一蝶画の仕業ぞ妄執なるべし

申すや猪猿犬を
則ち三毒の貪瞋
以て第一畜生とし
我心の勝ちを火と
云ふとハ
もし人眼悪しき時
ハ眼を閉て思案
しても第一の心なり
されバ大日経にハ一
念の眼を以て百経劫
の罪を消し
ある言葉を捨て

浮ぶ事なし思ひ損ふ人ハ天理に背き
を殺さんとしても我父母のごとし是畢竟絶ち
来る難にあハじとの背恩愛の忘れ情
の悪心より生ずる子ハ横死し嫁も舅も業病と成
て死後又かゝる業報を現ずるも元来父慈子孝
夫婦別ある正理にそむきて殺すものなれバ自ら
道理を現ずるの人にハかぎらず我心を知る時ハ
死すとも何ぞ恐るゝ仏も無き経を読み陀羅尼を
誦して解脱成仏あるにハ遠からん我も聖人の
言をまもりて三業を正しくし我法さんにもなどか其功

すこしの文字に
風の性ある故に
勤ひて息風となり
ておのれ入すんで
時を見ておく緑や
ふる時ハ息をと
一念の悪念劫に
に露まる時ハ火炎
劫切に上ん風も
又大ひに動ずれバ
震動するにあらび
や陰火と取なれ
あらバや河内の

あるべきんと思ひ惟して是より毎夜家根を改め
高き柱を捨て家具を捨て位階く
かの向ひも道理を中にすれども又にてあるか
し我年若中も儀式を調きれりてひ日にうた
く致し陰陽師を恐れだ神をも信せず
あまたの事あれども勤めもすなはち三毒の怨
念に遠ざかりし法道日ぞ我が行法も仏道を遂
得し是非の事何ぞ我が行力もおだやかんや世で
法道の大力や理解して居る所を我行力で
あれバ此世中をも帰宅して御幣仏具抔

河野久家ちの人手
跡しけ所ふ寄を従
し生きかへ逐ひ
あれ事取用ゆる
く速ちろ悪の割ぞろ
に半跡へ行に前さ
で挑灯袖の火の氷
ろとふろ人の来るかと
跡の中く見へ橋の所にて
行合ひされだ氏混
てろへさり帯の疵乃
火中くを中んとせ
ひく遊ぶされ来ら

早く至用意致し宵より金剛力を出し
修法さりやかうのおもく行じけるが子の刻頃まで
何の事もなく静かなりければ子丑も過ぎき事に
おもひあれ丑の刻頃にも無れおもく震動し
て陰火太閤き出で陰陽師顔色まさに顕れ
おのづ逆も我等ですき此術力なけ及び難し
とて頓首に尽きる退けりせり中の處
玄妙と所会ぜ信徒の可思る事ども有是
其後京町に何か真言宗の隠居房高
徳の中く喜ぶ書き見の款ありし少行へ詣行

遠く出でまれだあ
ぞ見て聞きえがあ
帰り逢ひ後ら乱行
疵れて勝ゆらる髪
に又宝来て逐ひに
行くるが不持ち来
順逢ひ眠くして通る
とへしが又も紙会
りのちとに行かれ
だ男子の毛髪ら
彼迄を取らおめる
かへりよしと渡りて
わたくしになりけり文

いたし一夜廻向のされ給けば震動止まり陰火を
見くはせ始めし程に此風少世間一統ふ了まり
隠なかれど実父吉田氏も子息の為それと気
ずひ初めて行事此お像でも莫大事やさしく
奇瑞なりして退去を致す隠れなき後裏
子と家々の處をいけゆ素より漆器を翫
術師範の有る事跡を絶えきれなむ右のお
傳き一蝶翁に嫁ぬ病中療治せし医師の志
朝めく惜しかなる事なり此事をすにけくも実
佛道を来世たのむも利せるさ大道なり右

養子は文武両道の達人たりしも其身元に仕へ
義ありて遁世せし人は武士なから仏道に心を
知しぶ〇〇〇〇事に労するよりは情さを
せめて右陰陽所の行ずる祖の身ならしを練
道の辯へあらんば三霊の孫の怨念消滅すべし
もありしも偕悪推するに今世仏道に志ざしあるも
さればまづ先を下賤貧賤の無知なる身の中にあるにあらじ
詠て浅き安見解の其身〇〇の〇の祖に〇かへたる
高位高官の歴々も仏道におろそかなる百万石
の大主なりとも無常迅速の時至れば閻魔の

摂州浪陽の清清
よりさゝ霊夏の夜
山田村に行きれば左
に火のひとを燃るか
ありありと見へし思
ひて追ひけるれども
の火返て山田村の
知己の家の二ふ
階の窓より入ける
清を悟る縁をおもひ
戸と敲きて入りたれ
ば之人遍る所に
大息つきてあはれ

独旅の身の世に居給ふ時は幼稚より多くの
人数附添ありて終に独りにて居給ふ事なし別
旅にて死すれどもひとり不生不滅なり是より
我も独り来りて独り去るべし修行の事もしき
己が智恵の有ときは風の人々に講するとて先
祖代々の檀那寺へ信養料を遣して或は住持
にたのみて葬儀あるし祥月命日には仏事を読じ
尾の〇にある〇〇に霊供を備へ香を焚き念仏申し
辞礼とするは俗家にては御道の用を弁じ
いふ家の世にては奉公が大切を勤むれど

かしこへて清き清
何ぞやしとしたき
人のと夜中に陽
行しくに人やん我
と追ひし家の子まで
逃かくる事くして
命を延べしと清
屋清るあるが〇ふり
あれだもひゆ秘あ
てふん此影ひ柄
さはり〇人な事
驚きと恐れて避し
作りぬ是不の一紙

子孫ら絶る奥国を攻られて筋骨砕るゝ武藤
ぶ殺ぬ其上我国乃祝儀大禮はけ[illegible]奥州三
年殺さ[illegible]海がなるぬ杯と理屈あり[illegible]
人毋を理屈説も[illegible]れ事なれ[illegible]
山如先佛道ハ二義ありと[illegible]の者八五
戒十戒十善戒とも皇国ハたゝ[illegible]の佛道
牧行乃玉迹世間[illegible]
して五戒十戒を持ず妻合子孫[illegible]奥国を
乃玉武藤など[illegible]むを誤乃悪僧世間乃
すてなの[illegible]又一義ハ俗人俗[illegible]牧

行の者ハ妻合奥国を樹ふ[illegible]仕[illegible]
の公儀ハ[illegible]家に[illegible]
切を職[illegible]と蔑ぬ[illegible]佛道牧の俗人を[illegible]
家ハ[illegible]俗人[illegible]世界の
[illegible]なり梁の武帝ハ佛道の志[illegible]
金銀乃[illegible]
牧者に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちりん識(しき)を知(しら)ずして佛道(ぶつだう)
一識(いつしき)ざり現在(げんざい)
のおのくなり此(この)識(しき)
現世(げんぜ)此世(このよ)にかなし
きれの後生(ごしやう)
し一生界(いつしやうかい)と現じ
離(はな)れ後世(ごせ)の苦(く)
文(ぶん)に手(て)て綴(つゞ)り明(あか)し
とふ言(こと)をもて人(ひと)
ともなり法(ほう)有(あり)
万法(まんぼう)離(はな)れの言(こと)ハ
流(る)識(しき)して生(しやう)を
五生(ごしやう)の事(こと)を知(し)る

その識(しき)をしらずして其身(そのみ)を傳(つた)ふる佛道(ぶつだう)親切(しんせつ)にして
玉(たま)に其信(そのしん)其識(そのしき)をしれハ直(ぢき)に其利生(りしやう)済力(さいりき)ハ其ところの
外(ほか)の中(なか)にも生死流転(しやうじるてん)の事(こと)一大事(いちだいじ)にして生死流転(しやうじるてん)
せざる時(とき)ハ後生(ごしやう)の事(こと)ハ離(はな)れて流(る)し至界(みき)現世(げんぜ)此世(このよ)に
おのづから悪業(あくごふ)今(いま)からの事(じ)に前後(ぜんご)して全(まつた)くとゝまる
ひとへに過(いう)しあれど無明(むみやう)煩悩(ぼんなう)を諸(しよ)の心(こゝろ)として
鏡圓(きやうゑん)大智(だいち)を知(し)らず所謂(いはゆる)大悟(だいご)に明徳(めいとく)を明(あき)らかの
ふとらふを此事(このこと)に住官(しうえん)するもの義(ぎ)に流(なが)れて
命(いのち)を慶安(げんぐ)のめぐり流(る)んずるものなれバ生死流転(しやうじるてん)
如(りん)要(えう)なり次(つぎ)に因果(いんぐわ)の道理(だうり)を知(し)る時(とき)を見(しん)んと

これも前生(ぜんしやう)の氣(き)乳(ち)
ハお生(しやう)れて消滅(しやうめつ)志(こゝろざし)
もすれバ成(なり)ても不識(ふしき)
くる和合(わがう)して其事(そのこと)
生(しやう)をしめへお生(しやう)前(まへ)の悪(あく)
業(ごふ)なれバ現世(げんぜ)に悪(あく)
ん悪業(あくごふ)なる故(ゆゑ)に後縁(ごえん)と
此縁(このえん)と極(きは)めてそれの
悪因果(あくいんぐわ)なりとするもの也
なんの苦業(くげふ)も一理(いちり)一
實(じつ)なり大(だい)道(だう)にも
大徳(だいとく)の人(ひと)といふてあり
て業(ごふ)とするそれ凡(ぼん)

苦(くる)しめず人(ひと)を損(そん)ぜず艱難(かんなん)艱苦(かんく)に沈湎(ちんめん)
ら次第(しだい)に未来(みらい)を發(おこ)し迷(まよ)ひ流(なが)しる勧(すゝ)め意(い)教(きやう)を事(こと)とせ
なく東(ひがし)を動(どう)ぜず假令(たとひ)手(て)を睦(むつ)まじく縁(えん)を繋(つな)ぎて云(いふ)
とも義(ぎ)に依(よ)りて文(もん)に辞(じ)退(たい)の心(こゝろ)なく此中(このなか)に心(こゝろ)の
道(みち)を立(たて)に神明(しんめい)佛陀(ぶつだ)の冥感(みやうかん)冥利(みやうり)をうけるの事(こと)
なく狐疑(こぎ)の心(こゝろ)なく濟(すく)ひしけれバ疑(うたが)ひもなく凡(ぼん)悪(あく)の
當然(たうぜん)無明(むみやう)煩悩(ぼんなう)宿因(しゆくいん)宿果(しゆくくわ)のなすところ佛道(ぶつだう)にあり
ぜんだ消滅(しやうめつ)させて趣(おもむ)きて何事(なにごと)も善縁(ぜんえん)を増長(ぞうちやう)
させて悪縁(あくえん)を増長(ぞうちやう)せしめず其身(そのみ)を善心(ぜんしん)にたもちて悪(あく)
心(しん)を多(おほ)く熟思(じゆくし)して善悪(ぜんあく)に方(かた)よく因(いん)を流(なが)れて之(これ)

時と一切平等なれば平等なれば
平等なり　佛も凡夫も平等なり
凡夫の時乃人情しゆ也　如佛
世界無量大無邊なり界内の国果を執
ゆへに有無乃法と好ぐ取謂寸法尺人慮なり故ふ
真言宗は有国有果ありて生佛二界平等
住なりと諦観して菩提心と發す時は魔
言震動して魔軍忍怖し降伏せずして事
なりと云　此諦観の教ちあまたの国果は仏二界平等
雖し後人ら此文面を見て仏法を軽慢する人多なる

法を執著する者に
そ世法を捨
なるやなふ
うん法力乃原ふ
無ちる人多し
法あん事と思れ
住古ふ事代好ぐふ
なら長事ふ妨ぐ代あす
し場と孤ぐ成事
孤和合喪力場ふ
力ぐ神佛の力乃
の場とを
事無量多数ゆへ
忘れ情四ぐん
事とふ佛ぐ
法を方
法あん事と思れ
住古ふ事代好ぐふ
なら長事ふ妨ぐ代あす
し場と孤ぐ成事
孤和合喪力場ふ
力ぐ神佛の力乃
の場とを
事無量多数ゆへ
忘れ情四ぐん
事とふ佛ぐ
法を方

法ハ狼藉せざらん
とらへてすゝむべからず
おきてらの事ハ究め
て後にぞもちゆべき
事定なり
同生死流転せざる時
は忠孝の道もかなはず
悪事破戒も免るべき
事をしらずして我等
生死流転の人ハ今
世の人も一人も助かる
なりとしらにむかふべく
此附もて

無二の業力當むるとも當るがゆゑに業力増上といふに
増し我ハ増し縁ゆけてもとに悪事もかゝる浅
滴き死をしてて家も絶へ末世まで悪名をとゞめ
殊して粗骨肉恩愛の人と永く流転道に
沈淪する事拙前生の悪因果は凡で一蝶也
劉氣の悦ハする世芥子ばかりも神佛信仰の志
なきに悪因果の業縁時至るべく萌さし
二葉に出るや否ら力は嚢と思ひの外なる枝
葉すでも互に生ひ立ち咲く栄百倍の実のなる
果を招けるは指んで成ずる事どもなり

あつかりのなきがさいてし
ぬるに随て落ち
生死流転に苦しみ
深くに大言を吐に
あらずや著おもひ者
なりに悪事破戒も
戒行ちのあらそはず
いかにしてもいかにもいふべば
他の嘲弄せしをも信ぜよ
神文に獅子の
当らずの頭に仰
すゝめにもむかへる
まのなれた下る者

與力増上縁の事

真言行者三密の行體は與力増上縁によるゆゑ
故に本有の徳現起すといふ此理をもつて今日我
等おのおの凡夫の男女世界一切無明の悪魔不
可行なる力增上縁と成るに本有の悪心不行
現起する理は適当すなはち阿字不不生無
十界五大六識の萬境を挙ぐるに難くかくし
凡夫の衆生に論説すれども悟れるものもまれなるにより
臆斷をいたし古徳の説置たまふを常に挙
ぐるのみ支阿字法本不生なり説給ふを聞けり

天地乃同の萬物地獄畜修羅人天聲聞縁覚
菩薩佛の十界すべて滅べき法なれば
始も終も終も始も今始めて生ずるにあらず
に生ずるもあらず又苦なる生死もなく
不滅ずるなきを佛道畢竟常住して動物
なる事なし遷変する事なし初なる生と
生死実義といふなり妙義と甚深法をふし
て為て為て為ふあるべし唯佛のみ能此生
実を明らめ扨又生滅変化あの本来生
乃義を明らめ一切法をのべ一つに第法を

法それぞれの理を立
ぬれば世法
やもかりの下おろ
上おろすべき法を
別べべべべ
なるものなれば
改遂れ行それぬを
以ての外あらば地
獄変形と云ふ
と度きあぐの事
なり俗と呼た
すれば下の事
なりとんや度

異なるなり情ふ能くいそぐ今生の人の形式
那なれば外相を約して人と名づけれども若
人一念地獄を背き地獄の外なり一念乃
慢性を殺せば即ち餓鬼の飢渇なるあらを
畜を起せば即ち畜生の知なり闘諍を起
せば即ち修羅乃心なり若五事を持ち即畜
人道の事なり一食に頂ありとも十善戒を持
或ひは四禅四無色定を修ぶ天道のんしも
四諦を修行するんを起して三界を厭ふ聲聞
なり第十二因縁を観じて生死を離れんを欲ふ

縁りに煩悩んを
まつく有漏の散を
書薩とて解し元
人の毛を解き時手時
を体をおひく經る
来通し夏を以て生
死變易せされば念
華法華今も言を
なすしかなり同
證せらく成りを理
玉極なり是れない
なる流布して生死變
叶はすべきや等

縁覺なり是自利し他を利する心發さ即ち菩
薩と云諸法の本不生を観ぜし佛のみなり
惣じてむかし此人の心に本より十界を具へたり自餘
乃九界の有情あらじ又善本より余の九界を具へたり是を生ず
乃本不生の實義と云 下略 夏を以思ふに邪慾まで
ときの凡愚いへ我等善生此宿業の拘る所を放解離
後の宿習のあるまじく又難き人と生き至要の
恩澤まく衣食住の三に安んじ妻子眷属従とも
まぐ何不足のなき身として無量の人道なるも
形る事あるを以て本財を世おわれ事に貪慾を起し

生死變易の隔り經
ぐおよふ人を生ずる
空の法の石と明
所く勤ひさ生死
宗の阿字本不生云
大圓海の生御説
無念說れの事を阿
圓鏡に證ひさ真
理と無作し初鐘の
まく行ずる事練
療の功積る時ハ向
あつて虚空に乾れ
やとも世下根の初

或時ハ物の為にして煩悩の我徳なむを起して殺生の
為にあられぬ表裏の言を行ひ彼に施さる事も
角ゆも身の勝手の大欲邪道又人の目に付くしく
何の心敷もなく只飲食に耽り身軆を作坊
自主し名聞利の為恥ざるゆに恥を思うまに
猶さへ道を御さまずに独我慾し其情不
耽りて其身を続ても知らず徒生其の畜生
又我慢んと發し人に勝ひ人の悪を好む酒
言葉をかざりてが非をも是にあまれ瞋恚は此
四種の道に迷ひ事其難く

くやくえき容易ならず
かくし[illegible]生死
生死のかつかつ[illegible]
林済宗の明眼[illegible]
則を受る事文字
ちくるまり[illegible]
女などに大[illegible]
乃ものか一別の[illegible]
あく動[illegible]大鉄[illegible]
とく生死出離の[illegible]
生に[illegible]の福を[illegible]
ふかぶかくのなひなる
縁力あるべからん

云ざますにおよびや退きて業ざるに今世因果因
縁の理を能弁へ戒の道を切磋琢磨の功を得
来るなどはすなはち業は百人に十人あるか無かなれど
若きと老たるとも弁へ次むで世の事を激しく[illegible]を
おとし今日ばかり[illegible]ぞ世間なり敬ふ稀の[illegible]
乃内わきて多き鬼畜の女道なり己く心を
つまく飲むべし[illegible]力に縁を招
別なく[illegible]増上として欲念だ度千一人ある
を能く[illegible]老若ぞ傾き曲妓女乱酒の席へ出
常時を甚くするさく[illegible]ますにおよびて終る

それ仏の大鉄を
ゆずとも弱別を深ん
切なる文字を悟るなき
付て教へ一旦発心
として更に心ある乃
地あり百性なる生
衰心の阿闍梨に
よりて密宗の生
理とすれの光
宗の事業門と号
九字護身法なれ
伝とあらへども
真理解し難く

阿字本不生の真理様に悟るべくハ是非善悪邪正
本来本有のものなる故変されたるもの面白かるな
んが時を得く現起するし是言曲妓女乱酒を
らなり己が面白く思ひて[illegible]和合して終に
同じ陀羅者となる是これを力増上縁とい
ふ至愚く阿修羅の悪業に堕
力増上縁しあり[illegible]身を嘆くべき
にあらずや又ら力増上縁の中に密細の高く
因縁にあくみて進んで[illegible]を遂して鉄石の
悪れ理をもちの善ん気ざすとも彼無力なる縁

縛ちたる其形又それ
くの心もおしく其後さ
ゆゑにして淫欲の
明瞭に從ひ離塵と
して是とする事に
あり其しく又云云
の阿字本不生の真
理也而門遮表不二
の表徳なりとんうり
ゑゆめて安心なる
を知る事となりけるも
只我おもひ悪口
の凡夫を神の濁つ

すなはち御くじにて救ひ出るものなり又芥子
なりしは悪念権ずる時ち無量の悪魔に随
縁和合より他力なり増上する事縁に速なり解
なき事にゆくりや莫見莫隠莫顕莫微なるに
君子慎其獨也とある聖言と思ひ合すべし
増上力増上縁の手をとりて六大の佛生法性
の本源と悟生するの縁燈をかしく明くべきなれ
やも手軽きを得らば心に記さば記す行を
得てなすべし都常に其真言の阿闍梨に
従ひて学ぶべし

に入て後密宗にもとき
妙財も大いに好力ある
事を知る又同儒に
かくも生死の理は
すべきや其己に心
救ふ人儒者の功徳
を知る事の理を
明らかにするとにて字
大に利あり夫り
ゆゑ又悟霊にして
勝りし衆理を見
て万事に通ずる
よのなかの縁ハあれ

怨念の事

文化年間の事とや當國小幡村に宮なり 尾州
嘗て見し百姓あり此悴なる者下女と密通し
婦妻となして後此嫁を又迎ふるに
何の事と知られしが大いに似合の嫁を迎へ
夜おもふ様にも下女を座敷に置ては其事の
縁談も出来ず思ひあれど人を以て事済
と悴に解き論させけれど渕瀬も変る人ならず
悴利欲にまどひ能も何も又乃心底に過り
ゆひ給へしと論すに然るに終に

下女を使んずるに頼りて孤ふれば乃ち弟に第
又も兄を大に悦び兄も亦厚く礼を以て接
遇と称して下女に対して重べきたあり給だ嫡と
地位を体ちりはぎ
嫡位乃ち体ちんや
と法師つまりいへ
そ兄へ皆変体色
故ふいも重地
かでくる智ぬに
嘗くして変と
恵上そ兄の
嫡位の変体ったた

なる客あんも神経とさ伝く出惟して客に
嫡下女が又と嫡を世事の子細を解き者を世下女
ぶ作行合とて多の合をとらへきり試又元亦
第しき兄なりけれだ兄大に悦び兄を校計を
宇意と第し兄合せ宇嫡亦相一致を作る
又乃方より下女に許へ母大切ふ切へだ解し嫡妃

任意外を立る事なく
嫡ふ夜食と云る云
謂稱ふ家しているの
大経書稽と云信
派風し水揚と推
信すに名し特
をむや立ち家姑
して大のふ結氏と
ひ方虚空ふ大
地寸度なく信りつく
嫡位にあ寸ふ
寸ふ乃ち家しふ
嫡と経書と熟通

をひ寸べしをひ越しきを下女をを
大に強き智時の嫡を
を思に急ぎ沙ふ
合せ事なれだ
ををれもなく和ふり
迎をお意の縁結家
て寸に婚姻智ひ文
と小情村に通程を
嫡乃ち約束ふく世
と和んて秋望に事

男し舞をそ和ゆりぬ婦人乃婦ゐと清ゐ
あ和く張アひゐ小ゐ幸　彼家離婚して後
ゐてとふひをれだあ和舞きき夫婦合もとつ
対夫身代も我家もら色男女もつひ仙宮
形き中にゐなれだ引くふ引おし書ぬれだ又宿
し後へ寄て仙不ゐかけ色ども毎秋淫夫ゐ
地獄く夫身とも現とも形く仙ゐにだ力魔力と
ゐく度毎に分れ色よぶちを怖しきいゐんゐ
なく淫ゐるだりなれど有れだ仙事も形して
生へいれる事同とゐんゐもゐだして形ゐて

張ちに分ゐ尾
おそりておと引ひ
ゐにを比較人田乃
祢いちをくおゐ田
してものづ笑をも
ぬぐずるの桑と仙
ゐ変れとゐてすの
とどやをて立形ゐ寿
しを色おゐ分ゐ
れだ大寿の盛芳
国田ゐも由ゐてお
の老ども出れる
おれ小決国田ゐ

新郎絵ずいゐ仙ゐる別淫く身をも投ぐと
注く中もれだ和も寄怪の事に思ひ寄尾
葉ゐ老のぐの事ども決して新郎の内淫と極め
二ゐるゐく古尾葉写和宮寿立へ引ゐ引ゐる
ゐを陰宮寿方ゐて怪が新屋より又とゐ参
ゆへもれだ仙事ゆゐんゐ寿新屋へ引ゐて
あれだおゐんに怪ゐ写ゐを腹と服ゐ猫で
淫く切ゐ腹とゐを出し服指ゐてゐく切新
し又ひむひ地ゐ八年ゐゐ張ど新の下ゐが
寿新ゐゐて絵に一新れ淫ゐ淫も形く無新屋

て国のめしたがはざるを
ふ大変国敵となる国ふ
て敵をと国ふ
めて以大変国ふ
らんかにふふ
まれて又第ふ第
ぬぐしいるとより
きる者なしとて敵ち
られた事ちりて
国も事ふられ
敵ふ事ひてかく
いなでそ活立ける
けふ人なて大変国ふ

へ出され事の恨さら最第二度家の
助るぬ拍ふ腹とすくに切殺作えられた
宇多帝大ふ御天しをぎ家内の男女を
や角し人ふ抱せ拍うち尾葉まられた
ふれまくと若癖治と拍ふくも腸と擬
ざしてけふ気ぬしてけし拍くとやられた
助気力乃ずともせめく腸と腹中へ納ん毒逆と
とりて度し嘗きる加平速名護屋の外癖
嘗永坂葉ふ以び癖治と拍くられで逆も御命
けひ殺られだなまるしの拍と乃言葉さんも治ふ

て以後ふ国敵ふ
に加る人ぶ元寿
事せ人ふ拍れ
ぶ元家ふ
きて以て伝の者三
十人ぶて国人家
乃国敵ふ
して人ぶ
たりに拍れて効
せよ林太郎ふ
ら国中に拍れて
寿怪いすて
ふ細ふ

しかく以人ぶ発角癖治を拍ふ毒ふ
ふく治ひ腸と入れ縫ひ市ふ
気多ふ拍縫治
彼下ふ敵歌て本と
拍て絶人ひ
右寿尾葉ふ平に
京和二年府下猫屋町裏町に住居して
清世寿ふ治年と
逆国で身分ふ源助
国ふ流ふ懐胎

方に信家卿を尋ねて参りけるに
遁て面会なくて有釈迦堂出て
帰り給ふ釈迦助方へ引れ給ふ後ま七
まで七日の間ふ寄
さもなく出給ふ
思ひかけさせて
後ずるゝ法
きく中ぐらの夏
に熱田の後せら
法事ありて秋
力及ばぬなら
後ありき法華経と

ふ和後て秋田法
楽せんとせしに石
金剛法華経国
の出来かねて
に国後
を海むつかりて
後と遁ぬてきて
出てより後後ぬと
熱して秋田国の
にかりて出へせん
てもれまて今国
見になりてもれた力
及ばぬ先の後

時事ふくみまで金く寺七が死雲の行ふ
ぬりて寧金くて百万遍と勧先をれた七日に
ある日彼方の様和り起こづり贄を切りよ
拾てあられた和歌き様ふ乃ちをるに
乃ち物もれ切をわ白論事人を悦息
わて正なられた間ひきんもち明て後
ふとちひ武井様と仰ぎて主に熟睡をぶ
程白国紙第て後を正乗ならるもえの
おくに知し知是まで稚くせ事ども鼎
ちに方文に第人なくを内様前へ寺七来て

なかく文婦たらん事適ずべからざるを知りて
髪を切りて指を落し志をも見すれども是をも
一向受ずありければ修行しけるが是より七歳の頃を
守るの事にも不便の事共をも思ひて微塵も子
みと尊親父母ゆかりしけるを修行かしける
きる因縁や自身の発心乃夫を身に随ひて仏を
なり近辺乃禅寺にて剃髪し法名を改め
十七ヶ後世を弔ふ観世音菩薩を念じ
経をも読み近国をめぐり後江戸へ出て川
越に志ありて是をとどめ庵寺をも開きて永く

住居の事を乞ふ新ばれども寛子もありて一
先古郷へ登り度と思ひて当家へ申て当時を
人の許へも申て茶屋町に安助といふ者の方に
先人の分抱として居ければ縁ありて大慈大悲
乃菩薩の御利益にて世国中ふた川の流れ
託婦して仏法に世国中をめぐりて
親元乃由を逸めく在に聞けられ
当国吉井郡瀬戸村南新宿村の下に今
大事と云ふもの是を文化十四年丑七月生霊庵
乃地より瘧病に悩まされ稀く薬を用ひて葉

行儒を書けるに以へども文に不験なりもく拙く
清水に小七と云者も八月上旬より瘧疾を病
されば我が或夜こと所ゝ下るを見に三
年已来ゝ友達和年ゝ云ふ者の
なる地わて此く
内ゝ下りやそ地
に無して
彼父母如か骨と云
見ちへ
けりて強食の
へ

と学む志もあるざしたれ我を病を
愛者のれ新ゝ
瘧疾と
ひくれ
に
病
に
父母
て
病
愛者のれ新ゝ
瘧疾と
ひくれ
に
病
に

和泉守殿の御家にて、ある人、ある所にて、ある人、ある所にて、ある人、ある所

[illegible]

[illegible]

[illegible]

郷ふたりとうるをの面く清ぶりちれを見
又繰ひもる紙に面くくゆり作ゆく仕に
紙よりけを人く関寺てきうちる伝番して
清さぐりもる大大面年ろる財蜀ぐりて車
ちせとして出繰ひもりもべく所乃物もち
出さればりもり面人後ふを数と郷ひちれ
だ後なる三大異ぐよ焼ふる雑事にあ
ぶ天乃嘗る兄し人乃力ゆく兄と降ぐんや
兄ぐ中大なる列れ本もちべ行ちち
てうあれぐちに家郷刀をおしむふたんとぐ

それ兄ふ兄ふ自紙く愛ふ郷ま帝ふや
初せんちうく弾の外に感じてなれきりて後
事に物きかの振舞ぶりもや十訓抄ふ むやむ
事好き愛人とらべられど仁世の人氣ともく
語ぶ遣ばいに天の夢る兄ひなりともちねき
ても清方に作ぶや人力法面たるに
ふ我天乃ふる兄ひもらべれ人くあて
ちちる兄ひを第して清させるぐふて何ぶや歌
徳乃論ちに玉さすが黄金人力と兄く
ふる家居を世下に庚猪ぐふち国呆の道

理よ著て國古の書へ後初りのんずやなぶれ
論ずて一口ふ自ら稽古を交らるべし爰
を門ら思ふ所ら上古ら今世ら美ら惡ならら
上古の是八今世の非みなり今世の非ら上古の
是ならの新ひやら多し佛道も爲なり他
門乃為方便あり中論あり往古ふの祖師
ひら智ひたる事ら信ら信の說ら
事も中ら小野右府ひおく今世ゆさぶ
ひあり樣也世の時ら天皇に不愛いさぶ
おら便ら智ら世ら知らにて也拙ら時ら

代なり義教を後初ひ相ら方ら康弼義逃
去ら實教を後ら新すら馬ら東風なり
才便乃因孫佛門乃為あら腸法ら
為へら牛ら時ら為ふ利ら珠玉益
形あり遊ふ乃人間小野右府むら八賢人乃
なら形今世ら人の慧名を交らら
以世乃新古ふら長ら二義ら論ら
似ら畢竟古今ら一人ふ長ら二義の論ら
ら思ら不新付是を將軍ひ言
ら長深ら天地ら元ら の及ら不

禅教共に無理不思議を説く
如理の了義を以て切に之を和の話則と為
迷く見いのみし之を急悟なる射を学び窮
然る義通を事なり感通を信ぜざる
活句乃ち天理なり天理を知る度
大抵是れ一度活潑乃ち出なり所謂
易に元亨元為貞密然不動感而通天下を故と
以て此地なり或人曰く理外乃ち出ずして
何事も秘す滅すといふ事なき
活潑き事なり天理の外に何なる物を

伊勢国伊勢神宮
伊勢国伊勢神宮
天下の主と
なさんやてだの日神
を生む次に月神次に
蛭子次に素盞嗚尊
と生まるいろ又法
華経るたの所よる
白雨降と雷電大日
霊尊と化生す此の
れを高天原に
らてかへりひ
しあるざ伝来書

基礎を知る中に
る月神を初の神
を生む次に月の神
日霊尊化生す又た乃ち
生む後に多の法眼を授ひ天照大神と
独り生まれの事いに元亨の
大の神神を現ず又た月の神の影ひ
弘法大師日本出世
の深の意又た同の武を討を討の影ひ
く天理を以へ元亨の

[illegible]

源と家康とのべき世に新古ふたつ兵乱の二
筆に弾ぜる事紙古をたづねし五中古今
世人気大小善なる理を弾べし当今
小人を小天地なり故に大天地乃善義小
人も善義を表する世界に新古小国に弾して
要形事形共善し新しきたづひく人事格
別異なり大乱乃善ある時を人事も陸なれ
ん乱世なりて学者なり上根なり勇猛なり明
君忠臣大悪人も多く小人佞人もかなし大

[illegible]

乱乃善ある時を人事にあくて根かして明君
忠臣大悪人もかなし小人佞人多く世智
ふく文武の道善人実かなく佞利を先とす定
水の流れ新来雑説句多をぬきて
乃名人あくまで学者なり
以ふ句に清にかわらきりくあく
義自所ふる同列一国集んを中に集ける
善ふる武士と世めて雑説師あれをいひ
と為りて一武士の一名をあして表傷こと
し双方家臣弾ずして大世のあく人事あだ

文学もおとろへ武道も衰へ世間
又同じ様に能の芸法大名御能者共を呼
て仙蓋四家を御能者共の者共
を新参あく四家の者共おろそかに
思ひて結構なるまおとりの大夫別当
今世おいてべしとも思ひ人々
らぐ〳〵礼儀なく又唐乃素義が
毋郷ゆらあの場ぐらい幸に後数方を事

文学もおとろへ武道も衰へ世間
又同じ様に能の芸法大名御能者共を呼
て仙蓋四家を御能者共の者共
を新参あく四家の者共おろそかに
思ひて結構なるまおとりの大夫別当
今世おいてべしとも思ひ人々
らぐ〳〵礼儀なく又唐乃素義が
毋郷ゆらあの場ぐらい幸に後数方を事

人世ども芸を忘れず士を高くして後を慕ひ秋
国乃青柳を滑川へ滑川へ流す人を
捨ひ〳〵宗の長文四公を郷の子脇四家の流
儀の家法を新しく建立して後を慕む
後三人乃見を〳〵郷〳〵数方の後を去
中に〳〵新乃乃を樊樹をまでふ乃ぶ
ねで芸を美人ふ新きぐらあ〳〵世界を
世を一郷の古を〳〵なすの理あんぐ
乃論今世の人郷あく八小郷方屏ふ同り

人世ども芸を忘れず士を高くして後を慕ひ秋
国乃青柳を滑川へ滑川へ流す人を
捨ひ〳〵宗の長文四公を郷の子脇四家の流
儀の家法を新しく建立して後を慕む
後三人乃見を〳〵郷〳〵数方の後を去
中に〳〵新乃乃を樊樹をまでふ乃ぶ
ねで芸を美人ふ新きぐらあ〳〵世界を
世を一郷の古を〳〵なすの理あんぐ
乃論今世の人郷あく八小郷方屏ふ同り

て安堵なる社なり
天文の比より今年と
凡そ百八十年に及
ぶし防州新宅に
載せり

[illegible]
氏ちまち文武に新
て[illegible]ゆり初めと
言のひて学文を
ませ四し紀ひと[illegible]
ゆり[illegible]の[illegible]
れて地頭職ゆり悔

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

況孫子は言も形なく兵を無形に立て天下の
強弱を量り鹿門の戰に遠て勝ず内に憂て
内憂して戈を倒に表切の張繡を為す孫
子は人乃首と斬
所なく所法あるとも主君に強き人乃首と斬
獲して之を國と掠奪ひ身徳の義を以て紹と違
ひ遂て外城の敵に敗られ民庶が恩徳を利
して小家を亡ぼし天下の諸侯を
くなる強ひられたる人の勢ひいたづらの義なりも
天地弥滿の大罪を犯すと孔子孟子の物
難あるとても後世に到て戰逆の事跡を掠

人を第一に曰を利を
かなしを掠ち大
なりと義理を
て貴と為ものくいく
時代世の勢と
ず又民と恵む
とうべ人を
てと掠ひ
永く清川に流ん
乱掠ずるものを
別民の利ろ義を
乃人を以て又世を
ひ付と卒徒

で徒へで寵奪乃者を難為を掠じ侵伐して
掠むる者を汚武と組とす玉茅董卓曹操司
馬懿ら此等を賊と
和せ沢上和人を
乃人と以て重人に
弱歌敬逆乃棟梁
と云て地獄
説て新乃掠
ひ為まあ
羅と乃人

[illegible]

理を忘却するの罪といへども、先号に釋を
[illegible]
[illegible]
[illegible]

なるゆゑ和漢開闢以来統がなき大悪無道の天子も
形ばかりの御譲位の儀式ありとも乗ずべきて統
が始め悪逆無道を天下に満ぐる先ず悪臣出来
次第に変じて善人も
[illegible]
なりや天下大めなる
非し濫るなり中文
[illegible]
変化ふ[illegible]人乱
と変化[illegible]
[illegible]
[illegible]

くの事ども
らも天子次第に
大ふのゆゑ
野天下の政事ふ
[illegible]
り世ふ[illegible]
[illegible]
時いふ[illegible]
[illegible]
国[illegible]
[illegible]
[illegible]

阿蘭陀とゐすなどの海洋ふ民まのかり時時器
ぶく孤ぶ孔子を宗ふ人なり賢人なりも天子の
教へ家国の治まり成事一のれ〳〵ばほど不浄の
信ゆあり人阿蘭陀をゐすなど孔孟さらら
あんや第ぶ基一抜又紂王のあき西遊を
道の天子ゐも無子微子微仲王子比干箕子の
賢人ゐて天下ゐ人ゐく孤さらら
てたる業もあ西遊ども元来是に遊孤ゐ
乃神仏なく仏を崇ちいまこそ孤ゐ
紂が西遊はく増長し給ふ天下万民ゐ怨

神仏は極楽力仏
菩薩の本願力に
あるべし雷〳〵
以来後世ゐ浄後
孤天竺ゐ浄土の
企ありとゐども是王
道の教へ
乃ち孤ふ神
恵に世を治ゐ
恵に仕せられ
やつ〳〵思て代
ぶ公家ふ天子の政
者とりまふ法を

敬となり名ら殿の世ゐ積悪餘殃となる物を
一家一国の主ゐ餘殃を一家一国ふ流ゐ天
下ゐ大主の大悪逆を道の餘殃を殿の天下中
に満ぶ孤ふ紂王の信任ゐ小忠を忠
殿の宗旨の内育徳を探ゐ更孤を形武を
西仙の徳ふつきゐと殿の餘殃を
発ゐ治国なり新く郎て永く天下万民の
苦難苦悩となる軍中ゐ嘆ゐ是を紂を一
人を孤宗旨の内育徳を忠武西仙の徳
に復ゐ天下治平なると思ふ解を今

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文政年中中田園上菜村百姓弥平治娘弥三郎
と云若後家古清水出居清水町瑞泉寺治
兵衛娘房と密通懐妊し弥平治又弥平治
近年俄に身代よくなり世ふ以て出来る限
と云ふ程に相成れど瑞泉寺なども娘房乃
事も中くゆるさず既に先後家にて御縁
結極まり婚姻の前日弥三郎房に対面せんと
之房をさそ教し互に自分の間と寄合が家抜
出て明と寄き死出の門を出て江戸へ逃又きらず清き井
戸なれば死出の旅けし新く生間人々寄集

仕ずる人のよきを
仕ずさせんと紙
て神道より仏法と
混合し又僧尼と
混合なす事も文
に神仏共同不
あるべきの論
ありたり対い我
神仏の事
僧侶の為
ざる理もあるべき
事なる為る理ぬ
てあ教ゆ予

事も井戸より引揚げて入棺して
間の御法にて葬ふ故障なし又峰き院
あ方すぐも死せんとせしが死者を死れ
どお対の事又弥平治親類も遠く他郡
を新し数多会葬も遠ひ為に弥三郎
の葬式ひ組抜て龍泉寺と云寺の抜別
由法を事物とて為るが出来年経て病死して
後法へ什物引法の時紛失して不知
金義を為れども紛失有知れざるして抜遠く
死せ仕て弥平治と内孫の者あ病中も

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

腸を攪乃切株にて突つゝかれぬ友達も集り
抱き起されだ大家にて腸かし出りも
きで唐若連行療治を加へられで当唐若の
[illegible]なれだ氏收先を知べ[illegible]に押入れと
[illegible]して腸を[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今雜談集上終